

私に教えてくれた和歌山の海

グエン ティ ハイ ハー
日本語・日本文化研修留学 ベトナム

和歌山の海と初めて出会ったのは、WIN コンコードという NPO の方々が、新しく来た私たち留学生を片男波海水浴場へ連れて行ってってくれた日だった。

静かな海は、笑い声や砂浜を走る足音、楽しそうに名前を呼び合う声で、私には静かではなかった。

私はそのとき、「一人で砂浜の隅に座るのだろう」と思っていた。初めての場所では、いつもそうだったから。だが、思いがけないことが起きた。私は一人にならなかった。WIN の方々が私に質問してくれた。言葉に詰まっても、根気強く耳を傾けて、私の拙い日本語を受け入れてくれた。そして、まるで昔からの友人のように、笑いかけてくれた。

最初は理解できなかった。どうして、見ず知らずの人が、こんなにも優しく、心を開いてくれるのか。そしてその瞬間から、和歌山は私に「心を開く勇気」を教えてくれた場所にもなった。



その後、訪れた二つ目の海は、加太海水浴場であった。和歌山での生活が始まってから2ヶ月ほど経った頃のことである。

そのとき私は、もう一人ではなかった。誰かに導かれるわけでもなかった。ロンちゃん、ニーちゃん、アナスタシアちゃんと私はその日の午後、探検気分で行った。だが私たちは、見事に道に迷った。目の前の道は途方もなく長く感じられた。頭の中で「引き返そう」という声がした。夕飯の時間、電車の時間、様々な“常識”が私を引き戻そうとした。それは、計画通りにしか動けない、いつもの私だった。

しかし、私はアナスタシアちゃんに向かって、静かだがはっきりとこう言った。「もう少し、歩こう。」

地図も、予定も、何もなかった。ただ「この道の先には、何か美しいものがある気がする」—そんな根拠のない確信だけがあった。そして私たちは歩き続けた。静かな丘を越え、誰もいない家々の前を通り過ぎ、海風だけが語る静けさの中を進んだ。

やがて、突如として、それは現れた。隠された入り江。誰にも見つけられていない、小さな砂浜。観光客も看板もなく、ただ空と水と静けさだけ。

まるで和歌山が、そっと秘密の引き出しを開けて「これは、あなたのための場所ですよ」

と言ってくれたかのようなようだった。金粉のような夕陽が海に沈むのを見つめながら、その時間を静かに胸に刻んでいた。

それは、「うまく計画したご褒美」ではなかった。むしろ、「さまようことを選んだ人」に贈られる贈り物のようだった。その日、何かが私の中で書き換えられた。以前の私は、綱渡りのように生きていた。すべての一步を計算し、練習し、確認して。

だが、和歌山は私に教えてくれた。素足で、知らない草の上を歩く勇気を。意味がわからない道の先にも、忘れられない景色が待っていることを。

三度目の海は、数ヶ月後の白浜海岸であった。

このとき私は、ベトナムからの旧友と一緒にいた。白浜は、和歌山の中でも特に有名な観光地であり、「まるで絵葉書のように」と言われている。そして実際にその場に立ったとき、その評判は決して誇張ではなかった。

海は溶けたサファイアのように広がり、波は絹糸のようにきらめいていた。空は水彩で描いたかのような淡い青と温かい金で満たされ、まるで誰かが「平穏」という言葉を風景に書き加えたようであった。私たちは笑いながら、裸足で砂浜に足跡を残して歩いた。私はずっとスマホで写真を撮っていた。そのとき、彼女が私を見て、こう言った。

「和歌山にいるときのあなたは、何か違う。楽しそうで、軽やかに見える。」

最初、何も言えなかった。気づいていなかったのだ。だが、彼女の言葉は正しかった。

いつの間にか私は、写真をたくさん撮るようになっていた。自分自身の、他人の、風景の。以前の私は、そうではなかった。ベトナムでは、カメラロールはいつも静かだった。けれど今では、たくさんの写真であふれていた。それは、私が「喜び」という新しい感情をもった証だった。

故郷では、街の喧騒と灰色の空がすべてを覆っていた。私はいつも時間や目標に追われ、ただ“走っていた”。けれど、ここ和歌山では一海の上に広がる空、遠くに浮かぶ山々の影、静かに息をする森—この風景は、ただそこにあるだけではなかった。私を包み込んでくれたのだ。それは、努力に対する報酬ではなく、「不完全でも、喜びや安らぎを感じていい」と教えてくれる、やわらかな贈り物だった。

この作文を書きながら、ふと気づいた。

私は「学びに和歌山へ来た」と思っていた。

けれど実際には、和歌山が、私がずっと避けてきた心の奥を、やさしく、静かに教えてくれていたのだ。私の予定外のことへの恐れ、人と繋がることへの壁、沈黙という名の鎧。

和歌山は、ただそばにいてくれた。そして、波が何度も岸へ戻るように、私に必要な気づきを何度でも教えてくれた。

だから私は、何度も海に足を運んだのだろう。

いつか帰国したとき、誰かにこう聞かれるだろう。「なぜ和歌山だったの？」私はきっと、微笑んでこう答える。「海が好きだから。」

けれど心の中では、こう思っている。和歌山は、私が「自由に生きることを恐れていた自分」を、そっとほどこいてくれた場所だった。そして、やわらかくて、少し勇敢な“私”が心の中にいることを教えてくれた。

穏やかで、潮風に包まれた和歌山で、私は自分を見つけた。

ときに、最も意外な場所こそが、一番“帰る場所”に近いのだと。

The Wakayama Sea That Taught Me

Nguyen Thi Hai Ha

Japanese Language and Culture Student Vietnamese

My first memory of Wakayama's sea was not quiet. It was laughter, footsteps in the sand, new names tumbling in the wind like seashells. WIN Concord took us - a bunch of new and nervous international students - to Kataonami Beach. I remember thinking I'd probably sit on my own, as I always did when visiting new places. But something unexpected happened. I was not left alone. People waited for me. People asked me questions. People smiled like they already knew me as a dear friend. I didn't understand it at first - how could strangers be this kind, this open? And just like that, Wakayama became the first place that gave me courage to open up like never before.

After that, the second beach in Wakayama I went to was Kada Beach. It was two months into my new life in Wakayama. This time, I wasn't alone, or even gently guided by a group. Long, Nhi, Anastasia, and I had set off that afternoon, but like true amateur explorers - we got lost. I stared down the road. It looked long, maybe too long. My mind said turn back - dinner time, train schedules. I could feel the weight of every old instinct pulling me back to safety - the version of me who plans precisely, avoids detours, never bets on uncertainty. But then I turned to Anastasia and said, quietly but surely: "Let's keep walking" No plan. No Google Maps route. Just a strange feeling - that the road ahead might lead to something beautiful. We kept walking. Through quiet hills. Past shuttered houses, through the stillness where only the sea wind spoke. And then suddenly, it appeared. A small beach tucked away from everything. It was as if Wakayama had quietly opened a secret drawer and said, "Here. This is for you." That day rewrote something in me. Before, I had lived like a tightrope walker, every step deliberate, rehearsed, calculated. But Wakayama was teaching me to trust that sometimes, the path that makes no sense might lead to the most unforgettable places.

The third time I was at a beach in Wakayama was months later, at Shirahama Beach. This time, I was with someone who had known me from before - someone who knew me from back home in Vietnam. She looked at me - and said "You seem different here, in Wakayama. Happier. Lighter.". I didn't know what to say at first. Because I hadn't noticed it. Maybe it was because I had started to slow down. To pause. To breathe. In Wakayama, the sky open above the sea, the green outlines of mountains in the distance, the quiet breathing of forests. The landscape didn't just surround me - it held me. It gave me the gift of softness and peace. Not as a reward for hard work - but something you're allowed to feel, even when everything is imperfect.

And as I was writing this, the realization hit me. I came to Wakayama thinking I was here to study abroad. But instead, Wakayama didn't lecture me. It listened. It simply stood beside me, letting me arrive at my own lessons, again and again, like waves returning to shore. Someday, when I return home, I know people will ask me: "Why Wakayama?" And maybe I'll still smile and say: "Because I love the beach." But in my heart, I'll remember the truth: Wakayama was the quiet, unexpected place that unmade the version of me that was afraid to live freely, and gave me back someone softer, braver. Here, in this calm, ocean-kissed prefecture, I found myself. And I found that sometimes, the most unexpected place becomes the one that feels most like home.